九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

[05_4] 図書館情報 : 九州大学附属図書館月報 : 5(4)

https://doi.org/10.15017/18020

出版情報：図書館情報. 5 (4), pp.23-28, 1969-04-20. 九州大学附属図書館
バージョン：
権利関係：

九州大学附属図書館月報

図書館情報

1969.4

The Kyushu University Library Bulletin Vol. 5, No. 4

話しことば ——日本人の外国語——

神中 寛

この2年半ばかりの間，WHO（世界保健機構）で仕事をしたおかげで，随分いろいろな国の人と友人になる機会があった。どうやらこの2年半を無事に過しはしたが，日本人が外国で，あるいは外国人と一諸に仕事をする時に，いつも問題になるのがことばである。多くの人から，大概の日本人は英語の読み書き（書く方は少々怪しいけれど）が出来るのに，どうして聞いたり話したりするのが不得手なのか，もっと英語の教育に力を入れなくともよいのか，と言われたものである。多くの場合，我々の間の共通のことばというのは英語だけであるし，もっともなことであるが，特に後進開発国では，ヨーロッパ，アメリカは進んだ国で，だから，英語のうまい人間はすぐれた人間という先入感も，どうしてもあるらしい。近代文明の導入があまりに急激であったため，その国の国語では，充分に新しい概念を表現することが出来ず，やむを得ず英語（またはフランス語）で専門教育をやったということもあろうし，多くの国は植民地であった時代，高等教育を宗主国に依存していたため，ということもあろうし，ある場合には，公用語はあっても共通の国語がないので，高等教育は英語でやらざるを得ないということにもなるであろう。そうしてみると，我々が英語が下手なのは，ちゃんとした国語があって，専門教育にとくに英語を必要としないからであり，彼等が英語がうまいのは，その逆だからにちがいない。現に一流の文明国では，小学校から大学まで，自国語だけで教育が行われ，専門書も自国語で出版されるのが当り前である——というのだが，むろんこれは負け惜しみの説明であって，日本人も外国語がうまいに越したことはないし，外国語教育のあり方ももっと考えた方がよい。しかし，ここでもう一度負け惜しみを繰り返すならば，あまりにも一般教育が普及しすぎて，外国語を専門に教える教師（外国人であれば良いけれど，そうでなくとも）の絶対数が足りないということも言えるであろう。

しばらくバンコックの熱帯医学研究所に滞在したときに見聞きしたところでは，タイ国の医学界では，英語が幅を利かしていることはむろんであるが，教育にはかなりの所までタイ語が用いられ，専門雑誌や医学の教科書もタイ語のものがかなりあって，やはり，数世紀にわたって，中国やヨーロッパの影響を受けながらも，独自の文化を持った独立国として存在して来たのも当然であると思わせるものがあった。一昔前の日本の医学の教科書というと，やたらにドイツ語（名詞のみならず，形容詞・動詞に至るまで）が並んでいたけれども，それよりもよほど「国語化」していると考えてよろしい。このことは，またタイ国の医師や技術員で英語のしゃべれない人はまづないが，どうやら他の国の人たちほどうまくはないし（特に留学の経験のない人は），かなり努力してしゃべっているらしいことにも通じるようである。

実は，はじめに述べたような負け惜しみの話をしたのは，その熱帯医学研究所がはじめてであって，私がたまたま日本語の本を手許においている時に，何か質問をうけ，君たちがこの本を読めるならば，そのことは全部この中に書いてあるんだが，と言い，また，これは大変立派な本で，日本人にしか利用できないのは残念だ，と言ったことから，だんだん日本人の語学力に話が及んで行ったのである。向うからは，良い本は日本語でだけでなく，当然英語で出版されなければならない，そうでなければ，日本人のあげた成果が他の国の人々によって利用されることがないじゃないか，と言うのだが，結局どうしても日本人の語学の能力につながってしまう。海外の出版物は，悪書も

良書もどんどん翻訳され，一方少くとも自然科学関係では外国語で論文を書くことが当り前になってしまった以上，文学書に限らず，専門書ももっと外国語に翻訳されなければなるまいし，更にすすんで，はじめから外国語で書かれた本がもっとあっても良いのではあるまいか。

外国で本屋や図書館をのぞいてみて，日本関係の本というと，少数の文学書，政治，経済，などに関係したもの，美術書などが主であって，私の目に入った限り，欧文の専門雑誌に掲載される論文以外，日本人の著作というときわめて少ない。日本の本屋や，図書館で我々が外国の本をふつうに手に入れられるように，ふつうにある日本の本が何処ででもよその国の人にも読める形になって居れば，日本に対する理解というものがもっと深まるにちがいないが，現状ではいささか無理な話であろうか。

（じんなか・ひろし：医学部講師；細菌学）

海外だより

ミシガン大学アジア図書館

鈴　木　彬　司

このたび，皆様のご好意によりまして，九州大学からミシガン大学アジア図書館の Japanese Bibliographer として勤務することになりました。着任後，二カ月になりますが，過日 Head よりその綱領といったものを伺いましたので，それとこの館の Basic Information の二，三を記して，渡米のあいさつ，報告に換えさせていただきたいと思います。

アジア図書館は，機構上はミシガン大学図書館の Branch Library であるが，建物はこの大学の中央図書館であり，Graduate Library である General Library の四階を占めている。従って，開館時間，貸出方法も本館と等しく，購入図書の支払は Aquisition Department で一括して行なっている。アジア図書館の蔵書構成は，現在，日本語資料97,381点，中国語資料97,109点，朝鮮語資料861点で，その他若干の他の極東語資料を有する。マイクロフィルムは，約6,000巻所蔵している。職員数は専門職員9名，非専門職員71名で，資料の整理は L. C. の分類法を使用しているが，歴史・文学にはさらに時代を細分するなどの手を加えている。著者記号には，Cutter-Sanborn Table を使用している。特に，L. C. の件名標目表によって，件名を入れた辞書体目録を作製していることは，アメリカの図書館の特徴でもあり，極東語資料に関しても資料の検索・レファレンスに非常に有益だと思われる。

さて，Japanese Bibliographer の主な任務は，(1)現在の所蔵日本語資料の維持・活用 (2)日本文化研究に必要な資料の選択・収集 (3)学生・教官への書誌的援助・レファレンス等である。

このうち，資料の選択については，現在，国立国会図書館「納本週報」，「出版ニュース」の他，各出版社の出版案内の中から，雑誌の書評，各種解題書等を参考にしてバランスのとれた収書を行なっている。特に，重点的に収集しているものには，書誌・索引・目録・便覧等の二次資料，および，地方史関係資料，統計類等がある。

古書の選択には，例えば，国文学研究書目解題，国史文献解説等を資料の価値・研究成果の評価の基準にしている。

アジア図書館と資料を通じて密接な関係にあるのが，この大学の Far Eastern Studies の Course で，1947年に Center for Japanese Studies, 1961年に Center for Chinese Studies がそれぞれ開講され，その他，近東・東欧などアジア大陸の諸地域に研究領域をもっている。日本の先生も度度来学され，教鞭を執っておられる。先日の Class で，日本語辞書の解説をされたのは，我我図書館員にも非常に有益であった。

最後に，ここの Center for Japanese Studies の教授と，その専攻の主なものを挙げさせていただき，今回の報告を終ります。Robert E. Ward 教授：前学部長　政治学，占領政策，William P. Malm 教授：音楽，能・長唄・歌舞伎，William J. Schull 教授：人類遺伝学，人類学，特に，長崎隠れキリシタンの研究，Edward O. Seidensticker 教授：日本文学一般，文学史，源氏物語，蜻蛉日記，雪国，その他の翻訳，Richard K. Beardsley 教授：人類学，日本の村落社会，Robert H. Brower 教授：日本文学，歌論，宮廷文学，Roger F. Hackett 教授：現学部長　日本史，山形県地方史等。Seidensticker 教授は，現在日本に滞在中，九月帰国の予定。

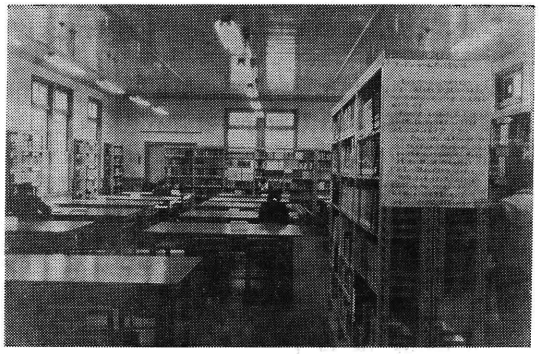
（このたよりは，本年1月からミシガン大学アジア図書館に勤務中の中央図書館整理課　鈴木彬司事務官から送られてきたものです。）

学内図書館めぐり

教養部図書館の沿革 （その5） —最終回—

昭和41年12月　第四代分館長に石蔵甚平教授（物理学）発令

昭和42年4月　入館者を制限——閲覧方式の一部改正



指定図書閲覧室

開架閲覧室は座席数とロッカーの数が同数であるため入室は当然制限されるが，一般閲覧室は出入口を別にして自由に出入りできるようにしていたため，前期授業期間や試験期或は雨天の場合など座席数を大巾に上廻る入館者があり，館内は座席がないためにあちこちにかたまって雑談する者が多く，喧騒と人いきれでおよそ図書館というには縁遠く，駅の待合室を思わせるような環境であった。この事については図書館情報3巻10号に述べているが，入館者の制限というある意味では利用を抑制する方法によってしか，現在の設備では館内の秩序を保ち学習の環境を整えることは不可能である。

昭和42年11月　教養部学生自治会より分館施設改善を中心とする9項目の要求あり

これは座席数の増加，机・椅子の改善，床の騒音防止，暖房装置の要望等であったが，これらは可能な限り実施に移された。即ち閲覧机には蛍光灯スタンドを取り付け，床にはマットを敷き，石油ストーブ（従来は石炭ストーブ）8基を入れ，開架閲覧室の天井はクリーム色，壁は白色に塗装して室内を明るくした。

昭和42年10月，12月　分館運営委員会において教養部図書経理の移算，教官閲覧室の階下への移転を承認，増加図書リストの作成（昭和43年度分については5巻2号に記載）

昭和43年1月15日から一週間続いた所謂エンプラ寄港反対デモの時は教養部が佐世保への中継拠点となったため，図書館職員も保安要員一名を残し全員が緊急対策本部へ動員されたが，図書館はあくまで開館しその業務を遂行した。このため石蔵分館長自ら保安要員一名と共に学生の閲覧事務をとられた。また，本年3月4日から約3週間続いた中核派による教養部本館封鎖により，開架室は教養部事務部の仮事務室となったが，後期授業が終り閉館中であったので一般学生には全く支障がなかった。

昭和43年8月　再分類作業ほぼ終了

〃　10月　漢籍目録編纂に着手

〃　7～12月　福岡県大学図書館協議会地区研究会の当番館となり5回にわたって研究会を開催した。

昭和44年2月　分館長選挙内規の制定　　分館運営委員会内規の改正

この二つの規則は分館発足当時，附属図書館長・教養部長間に交換された覚書を明文化したものであり，これで一応形式的には分館制度が整備されたといえよう。

一方施設面の改善充実は当館の当面の課題であり早急の新営工事が望まれる。当館がその機能を充分に発揮するには，学生数・教官数に応じた資料の充実と閲覧室その他施設面で充分快適な環境と条件を整備確保する必要がある。また，こうした図書館の充実こそ真の意味の研究と教育の場とすることが出来よう。

しかるに，教養部分館の現状は，上記のような理想的図書館の姿にはほど遠く，施設全体（閲覧室，書庫，管理部門など）が老朽化し，更に資料の増加累積と学生・教官の激増とが重なり，その狭隘さについては論外であり，このまま放置したならば教養部の教育研究活動に重大な支障をきたす恐れがある。

即ち，学習の場である閲覧室は約45年前，旧制福岡高等学校創立時に設立されたままの姿であり，昭和30年講堂を閲覧室に転用して座席数を増加させたが，名ばかりの雑誌閲覧室・新聞閲覧室の座席数を入れて計算しても，閲覧室収容能力は教養部学生数の僅か6％弱にすぎない。これは基準の

15%にはるかに及ばない。

戦後学生定員の増加によって，昭和43年度は在籍学生数，約4,200人の多きを数えているが，特に前期授業期などには，開館と同時に満席となり入館できない学生が長蛇の列を作って順番を待っている現状である。

前述した如く急場の対策として勉学環境と静粛さの保持のため，一昨年度から入館制限を行なっている。また，床のきしむ音，館内便所がない等と施設面での不備が，しばしば学生の不評をかっている。

次に書庫については昭和30年第1,2分校合併当時増設されたとはいえ，狭隘による過密の度合は想像以上で，現在約3万冊分の書架不足をきたしている。このため応急処置として床積みにしたり，木造閲覧室の中2階に置いて急場を凌いでいる現状である。なお教官閲覧室，事務室についても非常に狭くしかも同居しているということで管理・運営と非常に支障をきたしている。上記のような理由で新しい図書館施設が緊急に必要であるという事がいえよう。施設の整備，資料の充実と相俟ってスタッフを強化（質的な向上を含めて）し，望ましい近代的大学図書館への道を歩み続けねばならない。

調査報告

雑誌の利用調査 ——中央図書館——

中央図書館には，「新刊雑誌室」（座席数30）が設けてある。和雑誌254種，洋雑誌31種の最新号が排架してあり，利用者は自由に手にとって閲覧できる。退室に際しては，入口の係員に閲覧した雑誌名を告げるようになっていて，係員はその都度それらの雑誌名を記録しているので，ほぼ正確に利用状況が把握できる。だがここで考えねばならないことは，各学部にもそれぞれ図書室があり，独自の利用規程のもとに運営されていて，学生が自由に利用できる図書室もあれば，利用できないところもあって，中央図書館はそれらの学部図書室の利用状況と微妙な関連をもってくる。一概に中央図書館の利用状況のみから判断できないものがある。中央図書館では利用されない雑誌があっても，学部の図書室ではよく利用されているのもあろう。学部でよく利用されているから，中央図書館のものは利用されないことにもなる。このように中央図書館の利用調査を行う場合，学部図書室の利用状況を勘案することは統計上不可欠の問題であるが，今回はその概況といった意味で，中央図書館のみを観察してみることにした。

開架雑誌を10部門に分類して，それらの利用状況を検討した場合，各部門でよく読まれている雑誌は次のようになる。

（総記）1.サンデー毎日　2.週刊朝日　3.文芸春秋　4.朝日ジャーナル　5.アサヒグラフ　6.中央公論　7.世界　8.リーダース・ダイジェスト　9.現代の眼　10.展望　11.前衛　12.世界週報

（哲学・宗教・教育）1.思想の科学　2.理想　3.思想

（法律・政治）1.法学セミナー　2.ジュリスト　3.法律時報

（経済・社会）1.東洋経済　2.エコノミスト　3.労働問題　4.経済　5.経済セミナー

（商業・産業）1.実業の日本　2.ダイヤモンド　3.金融界　4.近代経営

（語学・文学）1.小説新潮　2.群像　3.文芸　4.新潮　5.文学界　6.文学　7.時事英語研究　8.英語研究

（歴史・地理）1.日本歴史　2.史学雑誌

（芸術・諸技）1.キネマ旬報　2.アサヒカメラ　3.音楽の友　4.アトリエ　5.暮しの手帖　6.みづゑ　7.芸術新潮　8.岳人　9.季刊芸術

（理学・工学・農学）1.無線と実験　2.科学朝日　3.航空ファン　4.CQハムラジオ　5.自動車工学　6.航空情報　7.自然　8.数学セミナー　9.数理科学　10.舵　11.エレクトロニクス　12.電波科学　13.天文と気象　14.SD　15.内燃機関　16.科学　17.船の科学　18.化学　19.機械技術

（医学）なし

外国雑誌は，Life と Time の2種類。

和雑誌254種のうち，よく利用されているものは65種ということになる。そしてそのなかでも特によく利用されているものは，1.サンデー毎日　2.週刊朝日　3.文芸春秋　4.朝日ジャーナル　5.アサヒグラフ　6.中央公論　7.キネマ旬報　8.小説新潮　9.世界　10.アサヒカメラ　11.音楽の友　12.現代の眼　13.展望　14.無線と実験　15.科学朝日　16.群像　17.CQハムラジオ　18.航空フ

ァン 19.前衛 20.自動車工学という順になり，なかでも，サンデー毎日・週刊朝日の利用頻度は抜群で，3位の文芸春秋の3倍を示している。学術雑誌よりも娯楽雑誌に利用が集中していることがわかる。このことは先にものべたように，学術雑誌は学部図書室で利用したり，または個人で購入していることにもなろう。

ところが，ここでいま一つ注意しなければならないことがある。たとえば，法律関係の雑誌について検討してみた場合，新刊雑誌室でよく利用されているものは，法学セミナー・ジュリスト・法律時報の三誌程度にすぎないが，バックナンバーになるとその利用は大いに拡ってくる。因みに利用頻度の高いベストテンをあげてみよう。1.法学セミナー 2.法律時報 3.ジュリスト 4.判例タイムズ 5.法学協会雑誌 6.民商法雑誌 7.法曹時報 8.法学論叢 9.判例時報 10下級・最高裁判所（刑事・民事）裁判例集となる。10位の利用もかなりの回数を示しているのである。ところが，利用度の最も高いサンデー毎日・週刊朝日・文芸春秋などのバックナンバーはほとんど利用されない。発行当時しか利用されない雑誌と後々まで読まれる雑誌のあることがわかる。後日単行本に引用文献として雑誌の論文が紹介されたりするからでもある。

雑誌は，あたかも生きのいい魚のように利用者の要求に直結する。図書館側としては，それを利用調査の大切な窓口として観察していかねばならない。

全学的な利用を担当している中央図書館は，学術雑誌の充実も必要であるが，その反面娯楽雑誌の購入もおろそかにできないことが，利用状況にもはっきりと現れてくるのである。それにつけても，現在の九州大学中央図書館の新刊雑誌室は，学術雑誌と娯楽雑誌を一緒に排架しているような状態で，学術雑誌で一心に勉強している横で，別の学生がグラフ雑誌をぱらぱらめくっているといったありさまで，部屋の予裕がないとはいえ，考えねばならないことである。ブラージング・ルームを設け，娯楽雑誌と学術雑誌を分離した運営を行っていくべきであることは言うまでもない。

絶えず新しい雑誌が発刊されている。その反面新鮮味を失っていく雑誌もある。かっての英雄がその知性と栄光を保持しているとは限らないように，年々内容の色あせていく雑誌もある。それゆえ，個々の雑誌の利用状況を常に追求し，中央図書館としてぜひ必要な雑誌の適確な把握こそ，図書館運営上大切なことであろう。

利用の窓

投書箱から

——中央図書館——

中央図書館の日曜日開館の希望が多いようです。たしかにその必要性は，図書館側としましても十分に認識しているつもりです。大学内を見廻してみた場合，中央図書館以外に落着いて勉強できる場所がありません。その図書館が日曜日は利用できないとあっては，たしかに不便だと思います。

図書館の利用状況を観察してみますとき，図書館の文献を実際に利用している人は50パーセント程度で，あとの50パーセントの人たちは図書館の閲覧室を自習室に使っているのが実状です。日曜日開館を希望する人たちも，その大多数はしずかに勉強できる場所を求めているのであってみれば，館内にそのような部屋の余裕があれば常時自習室として開放すべきだということは言うまでもありません。ところが，現状ではそのような余裕が図書館内にありません。学生諸君の要求は十分にわかりながら，いまのところご希望に添えそうもありません。

中央図書館では新館建築の計画を持っていますので，新しい図書館には常時開いておける自習室のようなものをぜひ設けたいと思っています。文部省の施設基準では，大学図書館の自習室は入っていませんが，新館建築に際しましては大学図書館の実状を説明して，自習室を何とか認めてもらうよう考慮しています。

なお，大学図書館の開館時間の基準は，平日は午後五時，土曜日は正午までですが，九州大学の中央図書館は，平日は午後九時，土曜日は午後五時，試験期になると土曜日も午後九時まで開館し

ています。これらの開館時間の延長は，昭和43年度におきましては854時間という大きな時間数を示しています。この時間は他の国立大学と比較しても決して引けをとるものではありません。図書館側としましては，わずかな人員をやりくりしながらできうる限りのサービスにつとめているつもりです。いましばらく現状でご辛抱願いたいものです。

船越前部長をおくることば

船越部長は，本年3月31日定年退職されました。

「本当にながいあいだ，ご苦労さまでございました。心からお礼申し上げます」。ことばとしては足りませんが，部長をおくるにはもっともふさわしいように思われます。

部長は，42年あまりのながい年月を，ただ一すじに，事務長として，また事務部長として，九州大学図書館の近代化への基礎づくりにささげてこられました。一方，福岡県大学図書館協議会，九州地区大学図書館協議会の創立，国立大学図書館長会議や国立七大学図書館協議会においては，九州大学の代表として，大学図書館界発展のために努められた功績はまことに大きいものがあります。また，ゆたかな知識，経験をもって，私達の育成，啓発にあたられたことにたいし，あらためてお礼申します。

いま，九大を去られるにあたって，部長としては感慨一しおのものがあると思いますが，私たちとしても，公私ともいろいろお世話になった部長になにのむくゆることもなくお別れしなければならないことはまことに心残りでございます。

おわりに，現在の学生運動の嵐の中で部長をおくるのは残念ですが，ますますご健康に留意されるようお祈りするとともに，また，今後のご指導をあわせておねがいいたします。

（山　崎　　正）

◆ 人 事 異 動

附属図書館商議委員の異動

商議委員の任期満了に伴い，下記のとおり発令があった。

44.4.1 石 井 次 郎（育）
〃 秀 村 選 三（経）再選
〃 浜 一 衛（養）再選　教養部分館長
〃 白 水 隆（養）
44.4.1 三 隅 二不二（育）
〃 正 田 誠 一（経）
〃 柘 植 盛 男（工）再選

図 書 系 職 員 の 異 動

44.3.31 船 越 惣兵衛（中央図書館事務部長）退職
44.4.1 山 崎 正（中央図書館整理課長）　中央図書館事務部長へ
〃 長 尾 公 司（東北大学附属図書館整理課長補佐）　中央図書館整理課長へ
〃 園 田 国 昭（都城工専）整理課目録掛
〃 玉 井 啓 治 採用　医学部分館受入掛
〃 原 田 紀 子 採用　経済学部図書掛

○○ あ と が き ○○

このたび，永い間親しまれてきた船越部長が定年退職された。図書館情報の発行責任者として，ご繁忙な職務のかたわら，毎月，几帳面に校閲された。数字に強く，仮名遣いにも明るい方であった。創刊以来，どうやら大過なく発行できるようになったことを感謝すると共に今後のご健闘を心からお祈りします。これからは愛読者として，また図書館についても，いろいろと助言や批判などを頂きたいと思っている。

なお，後任の発行責任者には山崎新部長があたる。

九州大学附属図書館月報「図書館情報」Vol. 5, No. 4.（通巻43号）
1969年4月20日発行・発行人　山崎　正
発行所　九州大学附属図書館・福岡市大字箱崎 3576・〒812・電話代表 ㊹ 1101 内線 5301